

国際シンポジウム「持続性の知恵を21世紀に活かす」

— 地球温暖化防止や生物多様性の保全は持続性の知恵を基盤に —

事務局

5月25日G8環境大臣会合（神戸市）の開催に併せて、「8つの持続性の知恵を21世紀に活かす」をテーマに国際シンポジウムを開催した。当日は、関西グループのご尽力により約50名の参加者を得た。藤村コノエ共同代表による「日本の持続性の知恵を21世紀にどう活かしていくか」をテーマにした報告の後、パネラーとしてハリ・スリニバス氏（国連環境計画）、孫一萱（ソ・イクン）氏（京都大学、大阪経済大学等非常勤講師）、ホアン・マシア氏（聖トマス大学非常勤講師）、アンデュール・ディ・カイザー氏（フィガロ技研株式会社）の4名に、加藤三郎、コーディネーターとして藤村が加わりディスカッションを行った。

（なお、P3～P6のマシア氏と孫さんの原稿は、当日の発表をもとにしたものである。）

当日の議論のポイント

1点目に、日本の伝統的知恵はそもそも日本特有のものではなく世界中に共通の認識が存在し、その精神はどの国においても失われつつあり、またそれを見直そうという動きがあるということ。2点目に、日本人はアイデンティティを失っており、伝統的知恵を活かす十分な余地が残されていること。3点目に、その知恵を生かすための制度や社会システムづくりが必要であること。4点目に、マスメディア等を活かした教育が必要でありその場合には現代の若者によりインパクトを与えることができる洗練されたものであること。5点目に、伝統的知恵はそのままの形では活用しにくく、毎日の生活の中でより具体性をもった情報として提供されることが必要であること、といったことが指摘された。以下に当日の主な議論の内容を示す。

パネルディスカッション

日本と世界の伝統的知恵

加藤：今回「日本人の知恵」としてまとめたが、数人の海外の方から日本だけではなく、みんなの

共通の伝統的知恵だと指摘があった。皆さんの国との相違点や共通部分があれば指摘してほしい。

孫：中国の場合、文化大革命後、改革開放が始まり、その反動で市場経済、経済至上主義の考え方を皆が持つようになった結果、急激で大規模な変遷が起きている最中である。中国でも生体心理学の分野で「天人合一」という言葉があり、非常に古い思想であるが、近年、再び注目されている。自然と人間の共生、自然も私たちと同じで同胞という考え方だ。最近、子供に中国の古典を暗記させる取組みがあるが、仏教や道教の教えや信仰を知ることは、我々の生活の中に役に立つのではないか。

ハリ：インドで持続可能性は非常に常識的なことで、毎日の生活にどのように応用しているか、日々の生活にどう生かされているかに関係があると思う。一杯のコーヒーを飲むという行為がどのように環境に影響を与えるかという意識を変えていくこと、理解を得ていくことが大切である。

マシア：伝統的知恵を現代の日本人が忘れていると同じように現在のスペイン人も忘れている。

「西洋」対「東洋」と分けられて考えられていたが、結局は西洋の中にも東洋があり、東洋の中に



も悪い意味での西洋がある。「もったいない」は特徴的日本語でスペイン語に訳せないが、日本人の忘れものではなく、人類の忘れものだと思う。

加藤：マシア先生の精神的・宗教的バックグラウンドは、キリスト教だと思う。何か違和感はあるか。あるいはそういうものを超えたものなのか。

マシア：聖書の中には、日本の伝統的趣旨に合わないものと、ぴったり合う要素の両方がある。合わないと言えば、「自然と人間が対立する」、「自然を支配する」という聖書の言葉がある。もう一つの面で、創世記物語の中で、合掌する人間の手は地を耕す人間の手であり、また昔から人間は自分と自然の調和、自分と他人と間の調和を切る、相手を殺す人間のもう一つの手だとある。仏教とキリスト教の一番共通の認識である「命は頂きもの」、「大自然は預かりもの」、加えて「大自然の命は壊れやすいもの」、そしてそれに対する気遣いが必要だという認識。私はその点で仏教と一緒に、平和運動や環境活動においても、非常になじみやすいところがあると思う。しかし自然との対立や乱暴な使い方は、それを聖書に基づき使われると困る。私はカトリックであっても、聖書は100%すばらしいとは言わない。自分が受け継いでいる伝統の中でわきまえ、そしてあるものを受け継いで活かす、あるものを批判的に受け継ぐ。伝統の受け継ぎ方が問題なのかもしれない。

藤村：本質的なところで、大きな違いはないにもかかわらず、引き継ぐ側の受け取り方によって誤解

も生じてしまう部分もあるということかもしれない。

カイザー：持続可能性に対してどのように取り組んでいくのか、哲学的な面からだけではなく、もう少し必要性というところまで噛み砕いて話をすればわかりやすいのではないか。

ハリ：日々の生活の中に使われる知恵を生む為にはどんな環境が必要か。知恵が抽象的なまま語られているとそれは理解しにくい。毎日の生活に置き換えて述べることが皆さんに分かりやすことだと思う。

日本人のアイデンティティ

会場：欧州では自分たちのアイデンティティを大切にしているように思われるが、日本は失っているように思われる。

カイザー：日本は大変美しい国だ。アイデンティティがなくなったと悩む必要はないのではないか。

ハリ：何かが変わった時、我々はそれの被害者であると思いがちだが、本当は我々が変えているのだと思う。我々が消費する食物やエネルギーの生産や、廃棄物の処理には、自分達が住んでいる以上の土地を必要としている。東京のエコロジカルフットプリントは、実に日本の3.5倍、大阪は2.3倍である。皆様に考え方や見方を変えていただきたい。環境の持続可能性一言でも、実は社会的、経済的、そして環境的な要素があり、その中でも、個人レベル、コミュニティレベル、市レベル、国全体のことがある。例えばコミュニティで起こっている事はその周りの市にも影響を与えている。環境のレベルを考えるときはこういった様々な視点で考えることが必要である。

伝統的知恵と仕組み・社会システム

孫：アダム・スミスが国富論の中で描いた市場経済は個々人が自分の利益を追求すると、結果的に公益にかなうような経済になるという構想を描い



ていた。しかし現実では、個人・自分の利益として効率を追求すると社会全体の公益を損なうことになっている。理念や考え方だけでは、人間は行動には移せない。そのような時にインセンティブを与える制度設計をこれから社会全体のシステムとして考えていく必要がある。

藤村：若い人の意見を聞きたい。

会場：伝統的な知恵をもう一度見直す事は大事なことは若い人も認識していると思うし、潜在的に気が付いている人もいると思う。それを見直す段階ではなくて、どうやって活かしていくか、活かすための知恵が必要なのではないか。

孫：個人の生活上の価値判断の基礎と、社会全体で考える時の基礎は価値観が必ずぶつかるものだ。逆に地球のことや社会全体を自分の日々の生活の中で踏まえて判断をすることが大事だ。そのためには、インセンティブを与えることが必要だ。環境に対する責任感や自立心というものを持たせる社会制度、制度設計を作っていく必要があるのではないか。

藤村：個人の努力だけでは進まない部分もあるので制度や経済的な仕組み作りが必要だということだ。そかしそれは「言うは易し、行うは難し」で今の日本でもなかなか進んでいない。

現代の若者と日本の伝統的知恵

加藤：若者の間でも、こういった伝統的な知恵を見直し使おうとするのは、どこから出てくるのか。

会場：私自身は現代社会において犯罪が増えている、人とのつながりがなくなっているなどの閉塞感があげられると思う。前の世代は、経済を発展させるという目的意識を皆で共有してがんばってこられたと思うが、それが壊れてしまった。犯罪の増加や、災害の発生など多くの問題がある中で、目的意識がばらばらになって何を指すのかわからなくなっている。その場合、伝統的知恵というのが大事なのではないか。

藤村：普段の生活で環境を考える機会が少ない学生さんはどう思うか。

会場：僕達の世代は「悪くなっている」と言われるが、それは親の教育が重要だと思う。僕達にも悪いところがあり、それは十分認識しているつもりではあるが。

会場：日本の教育では、環境問題は取り扱われずにいる。もう少しその機会を増やし、環境にとって具体的なことが「カッコいい」ということを上の方々が示すことが有効ではないか。今までの大人は場当たりのPRや広報の仕方に問題があったのではないか。

藤村：若い人たちが環境について真剣に取り組んでいこうと思うような雰囲気を出していかなければならないということのようだが。

ハリ：情報をどのように加工して配るかということが大事だ。難しい算数などではなく、毎日の生活に密着したことを、インパクトを持って知らせることにとっても効果がある。タバコは非常に悪いと言われているが、そのフィルターが土壌の中で分解されるためには50年もかかってしまう。こういったシンプルな情報も非常にインパクトがあると思う。

藤村：どうしたらもっとカッコよく、インパクトを与える事が出来るだろうか。

会場：企業も「もったいない」ということで合理化・コスト削減をやっている例がある。ある企業では、日本の「からくり人形」を工程にうまく使い込みエネルギーをかけずにものを運んでいる。持続性の知恵を仕事の中に遊びとともに取り入れていることに感銘を受けた。シルバーの人材が開



教育・マスメディア・情報について

発している。

藤村：日本の技術は世界に誇るものだが、途絶えてしまう方向である。遊び心を加え活用していきたい。

会場：長い歴史の中で生まれてきたこの知恵が、だんだんと崩れ去ろうとしている背景にはインフラの変化があると思う。例えば、昔だと、祖父母と同居し両親が共働きでも祖父母から知恵やモノの大切さを教えてもらったし、また地域の祭りなどにも学べきものがあつた。

カイザー：趣味と仕事のバランスが大事だと思う。仕事ばかりして遊ばない人はやはりダメだと思う。趣味から何か暮らしに生かせることを生み出すことが大事だと思う。

マシア：若い人は例えば発展途上国に出かける、国内でも同年代で自分とは違う階級の人に接するためにバイトをするなど具体的な体験から得てことがあるようだ。今ここで私たちが取り上げている問題は、単なる個人的なレベルの教育だけでなく、どうしても政治的、経済的な最終決定にかかっている。政治経済的に行わなければならない決断、意識を相当呼び起こさないと足りないという危機感がある。問題は大きい。

藤村：先程かっこいい大人たちが少ないという話があつたが、自分の周りにそういう大人が少なかったら、自分から求めて外に出て行って違う世界を体験して、自分からそれを発信していくのもいいのではないか。

孫：日本のマスコミ・メディア、特にテレビ番組に、若者に教育や知識を与えるようなものが非常に少ないと感じる。今回四川大地震の様子がかなり報道されているが、それを見たときに善良な人なら募金しようかという気持ちになる。それがマスコミの力だ。地道なNPO活動のPRもそうだと思う。経済的な制度設計と日本人の働き方や生活のあり方、社会構造を日本人自身が少し変えていかないといけないと思う。日本人は真面目で頑張っていると世界でも言われている。京都市ではレジ袋有料化に伴う指定ゴミ袋の導入に、市民は2、3週間で適応した。中国ではそうはいかない。日本の民族性を感じるころだ。それをうまくアピールすれば、受け入れ実行していく国柄だと思っている。

藤村：日本人は卑下ばかりせず誇りを持ち伝えていかなければならない。

ハリ：環境管理に関する最新の考え方で、環境から何を取り出しているか、価値全部を計算する取組を検討している。森から木を取り出したとするとその値段だけを見るが、そこから発生する環境負荷をコストに換算しすべて合算する最新のエコシステムサービスという考え方がある。すると木の値段は非常に高価なものになる。この新しい考え方は、京都議定書の後に行われる国際的な交渉のツールの中心として使われるだろう。皆が日々行っている行動で実質のコストを考えることが大切だということだ。例えばコンビニで買い物をすると、レシートにその金額だけでなくそれによって発生するであろう二酸化炭素の量を書いておくというシンプルなことによって、環境という難しい問題が日々の行動に密接に関係してくることになる。

孫：今大学の生協のレシートには必ずカロリーが書いてある。それと同じような発想でよいかも知れない。